

## 優秀賞

### 41. 慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの「居場所」としての家

川島美保（高知大学医学部看護学科）

1. 目的：居場所はアイデンティティの確認、熟成の場とも言われ、人間の成長には生涯に渡り欠かせないものである。特に思春期では、発達課題であるアイデンティティの確立に重要なものであり、看護者として、慢性疾患をもつ思春期の子どもが居場所を維持できるよう支援する必要があると考える。本研究は、慢性疾患をもつ思春期の子どもが捉える居場所と居場所づくりの特徴を明らかにし、看護への示唆を得ることを目的に行った研究である。その結果、【過去・現在の居場所】として〔「居場所」としての家〕〔「居場所」としての仲間のいる場〕が抽出された。今回は、〔「居場所」としての家〕について報告する。

2. 方法：本人及び保護者から同意の得られた小児慢性特定疾患（慢性腎疾患、喘息、糖尿病）、運動障害をもつ入院中または外来通院中の思春期の子どもであり、意識障害や精神発達遅滞はなく、重篤な状態でない者、言語的コミュニケーションが可能者9名を対象とした。データ収集は半構成的面接法を用い、承諾が得られた場合のみ録音及び記録を行った。データ分析は信頼性及び妥当性確保のため、小児看護学専門家のスーパーバイズのもと、逐語録より意味内容に沿ってコード化し、比較分析した後、カテゴリー化を行った。

3. 倫理的配慮：研究参加及び中止の自由の保証、体調不良時の対応の保証、プライバシー保護の保証、データの厳重な管理に努めた。また、身元を保護した上での学会発表の可能性についても本人及び保護者より同意を得た。

4. 結果：対象者は男児4名、女児5名で、年齢12～18歳（平均14.7歳）、罹病期間 約9ヶ月～約18年（平均9.6年）であった。〔「居場所」としての家〕とは、慢性疾患をもつ思春期の子どもの住まいであり、側面と意味づけが抽出された（表1）。

表1 「居場所」としての家 カテゴリー一覧

側面	場の意味づけ
構造的側面	生活しやすい場
生理的側面	基本的な生活を送る場
機能的側面	安全基地となる場
心理的側面	くつろぎの場、馴染みの場、やすらぎの場
社会的側面	感情を共有する場、力を引き出される場
時間的・空間的側面	時空間を共有する場
療養的側面	自分の病気につき合ってくれる場、生きる姿勢を力づけてくれる場

5. 考察：慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもにとって、住まいが居場所となるためには、単に住まいが物理的に存在しているだけでなく、療養行動を含む生活を送りやすいように、適切な構造や必要な物品のある《生活しやすい場》でなければならない。この物理的な居場所が整えられた上で毎日《基本的な生活を送る場》で安定した生活を送れることが《安全基地となる場》につながっていた。《安全基地となる場》という、いつでも戻ることのできる場だからこそ、子どもは心身ともに癒され、学校等の社会活動の場で様々な活動が行える。さらに《自分の病気につき合ってくれる場》《生きる姿勢を力づけてくれる場》でもあり、あらゆる活動のエネルギーの充電の場となっている。したがって、慢性疾患とともに生きていく子どもと家族が基本的な生活を送れるよう調整するケアとともに、家族の子どもにつき合う姿勢を尊重するケアの必要性が示唆された。（本研究は平成15年度 高知女子大学大学院看護学研究科 修士論文の一部である）